

『臨床画像』の編集主幹への就任にあたって

このたび2024年4月より、江原 茂先生の後を引き継ぎ、『臨床画像』誌の編集主幹をさせていただくことになりました。

『臨床画像』は1985年に創刊されました。当時は多くの病院でCTやMRIが導入され、IVRも肝腫瘍の治療などのさまざまな手技が普及しつつあった時代であり、メジカルビュー社編集部には画像診断について深く学びたいという声が多数届き、本誌の創刊に至ったとのことでした。その後、『臨床画像』は2017年に電子書籍化を行い、2021年1月号からは誌面がフルカラー化され、レイアウトも大胆に変更されました。私が大学を卒業して放射線科医になったのが1986年ですので、本誌とほぼ同じ年月を放射線科医として歩んできました。発刊時から私も折に触れて『臨床画像』を読んでおりましたが、当時より本誌はビジュアルな誌面構成で内容はわかりやすく、30年以上たった今でも勉強になった特集号は手元に残しています。

今回の新体制では、従来から編集委員であった江原 茂先生(JCHO仙台病院)、田島廣之先生(埼玉医科大学国際医療センター)、対馬義人先生(群馬大学)、土屋一洋先生(杏林大学、JR東京総合病院)(50音順)に加え、東 美菜子先生(宮崎大学)、石神康生先生(九州大学)、隈丸加奈子先生(順天堂大学)、中本裕士先生(京都大学)、平木隆夫先生(岡山大学)、梁川雅弘先生(大阪大学)(50音順)という放射線医学の各領域から錚々たる先生に新たなメンバーに加わっていただきました。

今後の『臨床画像』の方針としては、従来と同様に、放射線科専門医、放射線診断専門医を目指す若手の医師を主な対象として、ビジュアルでわかりやすい特集や連載を提供するとともに、すでに専門医を取得した医師でもより進んだ知識を得ることができる総説論文も随時掲載したいと考えています。また、2024年1月号に掲載された『画像診断医が知っておくべき抗アミロイド抗体疾患修飾薬「レカネマブ(レケンビ®)」にまつわるABC』[櫻井圭太ほか(国立長寿医療研究センター)]のように、その時々の最もホットな話題も時機を逃さず、緊急特集として掲載したいと思います。

今後も変わらず読者に役立つ専門誌であるためには、本誌も常に変わり続けたいと考えています。「……の特集を組んでほしい」、「……についてわかりやすく解説してほしい」、「……という切り口で記事を作成してはどうか」など、読者の皆様から編集部宛にご提案をいただければ、よい企画はどんどん採用したいと考えております。ご支援のほど宜しくお願いいたします。



栗井和夫

広島大学大学院医系科学研究科
放射線診断学